
消える五人

M.k

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消える五人

【Nコード】

N7723F

【作者名】

M・k

【あらすじ】

小学6年生の高野進の学校で事件が起きる。その事件の首謀者である犯人が進に挑戦状をわたし、進は事件に巻き込まれてしまう。

登場人物紹介

高野 進 - 野球が好きな小学六年生。おじいさんは探偵だった。

小林 美保 - 進の同級生。読書好き

岩村 誠 - 西京小学校の校長

飯田 愛子 - 西京小学校の副校長

坂本 広輝 - 進たちの担任

宮本 絵海 - 二組の担任。新人教師

高橋 光介 - 事務員

福島 奈々子 - 教育委員会委員長の娘

植松 真理 - 将来先生を目ざしている。父は岩村校長と知り合い

岩村 直人 - 岩村校長の息子。進の親友

田島 光平 - クラスメイト

加藤 亜和 - 調理員さん

怪盗キサト - 連続誘拐事件の犯人

これから起きる
出来事は五日間
かけて行われる
連続誘拐事件の記録。

一、怪盗からのメッセーシ

- ある日曜日西京小学校にこんな手紙が届いた -
「はあ今日も疲れた」

今のは岩村校長。いつも仕事が終わると、必ず言う言葉。
「岩村先生。何か変な手紙が届いてますよ」

今のは、飯田副校長。いつも元気
でも、今日はいつもの元気がなく、不安な顔をしていた

「どうしたんです飯田先生？何か元気がないですよ」
「いや、だから変な手紙が届いたんですよ。ちょっと見てください」
いつもしつこくない飯田先生が、そこまで言うならと、校長先生はその手紙を見てみると
そこには、こう書かれていた。

一カ月後の月曜日から金曜日
毎日一人ずつ消失する。

怪盗キサト

「・・・・・・・・」

この手紙を読んで校長先生は固まってしまった。

「岩村先生、どうしましょう」

「捨てとけ、どうせただのいたずらだ!!」

「いや・・・・・・・・でも」

校長はさっさと帰ってしまった。でも、飯田先生は気がきでならなかった。

二、新学期

月曜日。新は眠そうに通学路を歩いていた。

「おはよう」そう言ってきたのは、同じ野球チームの岩村直人だった。進は「よう」と

一言だけ言って済ました。

「進、今日も眠そうだな、どうした？そうか、昨日の試合ノーヒットだったから、落ち込んでいるんだ」

直人がそういったのは本当だった。でも、それじゃあ、いつもの俺だった。

進がなぜそう思ったのかと言うと

今日から新学期。しかも高学年になる。

「進」今日はクラス替えがあるんだよね。またいつしよのクラスになれたらいいね」

「六年間お前と一緒にのクラスになるなんてかなり確率低いぞ。」

「その低い確率で、俺は進と一緒にのクラスになるんだ」

「じゃあ、その考えが現実のなるようにがんばるか」

「ああ」

そういつてずっと話していたら、いつの間にか学校についていた。学校に着くともうクラスがえは、発表されていた。

俺は自分のクラスが何組か見ていたら、直人が急に話しかけて来た

「進は……一組で、俺は……よし！！俺も一組！」

「おお、願いが現実になったじゃん」

「なっちゃったよ、現実に」

二人で喜んでいるうちに朝会があり校長先生の話で二人貧血で倒れた後、PTAさんの話があつて

町会は終わった。

教室に入ると隣の席の奴は女だった。そいつの名前は小林美保と言った。

そして、チャイムが鳴り先生が入ってきた。先生は男、年齢は二十五才から三十才、名前は坂本広輝

と、黒板に書いた。

「坂本広輝と言います。皆さんよろしくお願いします。先生は今年この小学校に来たばかりだからいろいろ分からないことなどを教えてください

と言った。

後、西京小学校では、二つのうわさが流れた。

その一、今年この学校に教育委員長の娘。福島奈々子が転校してくると言つつわさ。

その二、これは俺もびっくりしたことで、怪盗キサトとかいう奴が

ら脅迫状が届いてきたということ。

その一のうわさはどうでもいいが、俺が気になったのが怪盗キサトのほうのうわさだみんなは「そんなのただのうわさだよ。うわさ」とかいていた。

クラスメイトからは「進のじいちゃんは探偵だったんだろ。この脅迫状のうわさどう思う？」とか聞かれた

そう、俺のじいちゃんは、昔、探偵をしていた。少しは事件を解決したそうだが大きい事件などは全く解決をしていない

でもじいちゃんをよく俺に「三丁目の山田さんの事件を解決したのはわしじゃぞ」とか言ってきたが山田さんとは誰なのか俺もよくわからない

脅迫状とか、俺はよく分からないからそういう奴らには「俺、別に、興味ねえしそんなのうそだろ」とかいったが、なぜか頭に引かかるものがあつた。

怪盗キサトは夜の学校で笑った

「楽しませてくれる探偵さんが見つかった」と・
・
・

三、怪盗からの挑戦状

四月の中旬、校長先生の元に一つの手紙が届いた

「・・・・・・・・・・」
「岩村先生どうしましょう。コレはただ事ではない感じがするんですけど・・・・・・・・」

「いや、でもまだ事件が起きたわけではない、警察に連絡するのは

まだ早い」

「しかし……」

手紙の内容はこうだった

五年一組にいる生徒、高野 進君に挑戦状を送る。

警察に教えてもいいが、意味はないだろう

怪盗キサト

「高野進？」

「あゝ、あのおじいさんが探偵だったって子じゃないですか？」

「よし、その子に来てもらおうか」

- 次の日 -

いつものように直人と登校していた俺は、教室に入ったら先生に呼ばれた。

「高野く、校長先生が呼んでるから校長室に行ってくれ」

俺は、何だろうと思いつながら校長室に向かった。

「失礼します」

そこには校長先生と副校長先生がいた。

校長先生から呼ばれるなんて体験初めてだったので俺は緊張して「なんですか？」と聞いた。

少しの間、沈黙が続いた。そして、校長先生がきりだした。

「進君、ちよつとこれを見てくれないか？」

そついつて校長先生は、一つの手紙を渡してきた。

「……なんですか？、これ」

「見ての通り、脅迫状だよ」

「きよ、脅迫状！？」

「ああ、最初はいたずらかと思ったんだが、昨日また手紙が届いてな」

「で、そこにはなんて書いてあったんですか？」

少しの間沈黙があつて、校長先生は一言こういった。

「進君に、挑戦状を送る……そう書いてあつた」

「ええ！……！」

俺が、驚いていると、副校長先生が理由を説明しに来た。

「たしか、進君のおじいさんはたんでいだつたんですよ」

「はい、まあ一応……山田さんの事件を解決したそうです……」

「山田さん？」

「あ、いえ、なんでも」

「まあ、だから怪盗キサトは進君に挑戦状を送つたんですよ」

「それって何か、話が大ざっぱな気がするんですけど……」

副校長先生としゃべっていると、見かねた校長先生が、

「だから、怪盗キサトという奴は、何らかの事情で進君のおじいさんが探偵であることを知って、孫の君に対決を言い渡した。これではなく分かつたろう」

「全然、分かりません」

「わかつたろう」

「は、はい」

でも俺は何度考え直しても、校長先生の言いたいことがさっぱり分からなかった。

四、一人目消失

- 事件が起きる前の金曜日 -

校長先生から話を聞いてから、何日かたった金曜日のことだった。

俺は怪盗キサトの話を聞いてから、緊張して夜も眠れなかった。

その日俺はまた校長室に呼ばれた

「進君、前の話覚えてますよね」

「はい、そりゃ覚えてますよ」

そう、事件が起きるのは来週の月曜日、五月三日だった。

「進君、がんばってくださいね」

「あの、実はちょっとお願いがあるんですけど……」
「何ですか？」

「その、一人じゃ寂しいと言つか何と言つか、だから一緒に手伝ってくれる人が欲しいなあ何て思っちゃって」

「要するに、誰かとコンビを組んでやりたいと言つことですね」

「はい、まあ」

「校長先生どうでしょうか」

外を向いていた校長先生はこっちを向いて一言こいつた。

「わしだったら、いつでも進君の手伝いくらいは、できると思うんだが」

「……………」

「……………」

校長先生は、また外を向いて

「コンビくらいは別に、作ってもいいぞ」

「……………だそうです」

「はあ、分かりました」

俺は、失礼しましたと、一言だけ言つてその場を逃げるように立ち去つて言つた

教室に着くと俺は早速誰と組むか考えていた。

「やつぱり、直人と組むかなあ」

考えながら席に座ると、隣の席の美保が喋りかけてきた。

「どこ言つてたの？進」

「ん？ああ、ちよつとな」

「ちよつとつて何よ、ちよつとつて」

「だからちよつとはちよつとだよ」

「じゃあ、当てるよあたしの勘だと、今話題になつて怪盗キサトとか言ふ奴の話でもしてたんじゃないの？」

「え！？いや、違うよ」

「あたしの勘はあたるんだから、怪盗のことなんでしょ

もう、嘘ついても意味はない、そう思った俺は美保に全て話すことにした。

「もう、降参、降参、正解だよ。怪盗キサトの話をしてたんだ」

そういつて俺は、半月前この学校に脅迫状が届いたこと、そして自分に挑戦状が届いたこと、誰か手伝ってくれる人を選ぶこと、全てを美保に話した。

「えー！！すごいじゃない、進！」

「しー、大声を出すな」

「で、そのパートナーは誰にするの？」

「そんなのもう、ばれちゃった。お前しかいないだろ」

「やっぱり、あたしか」

そんなこんなで、パートナーは美保と言う、うるさい女に決まってしまった。でも、こいつの勘は、いざと言う時に、役に立つかもしれないな……

そのころ怪盗キサトは着々と準備を進めていた。

「これでやっと恨みを晴らせる」と言っ

そして、大声で笑った

土日は怪盗キサトについて考えているうちにあっという間に過ぎ、月曜日になってしまった。

一時間目は、算数の時間だった。算数の時間美保が喋りかけてきた。

「とうとう、来ちゃったね。この日が」

「ああ、そうだ、お前の勘だと何時ごろ起きると思う、誘拐が」

美保はペンをくるくると回しながら、考えて

「多分、一時間目は誘拐は起きないと思う」

「へえ、なんで？」

「えっ、勘よ、勘」

「ふーん」

美保と喋っているうちに、先生がいきなり俺を指してきた

「おーい、進、この問題といてみる」

「えっ、俺？」

「そくだよ、お前だよ」

「えーと、分かりません……」

「しょうがないな、おい、美保この問題とけるか？」

「567です」

「よし、正解だ」

チラッと美保を見ると、笑いながら

「分かんなかったのー」

「怪盗キサトについて考えてたんだよ」

そうこうしてるうちに、一時間目は終わり、二、三、四時間目も何も起きずに終わった。

俺は、やっぱりただのいたずらだったのかな……と思っていた

・そしてついに事件は起こった・

先生が理科の実験で、アルコールランプに火をつけたその瞬間だった。

先生が持ってたプリントの束に火がついてしまったのだ、火は結構高く燃えてみんなが、パニックに陥ってた。

だが、なんとか、火は消化することが出来て、実験を再開しようとして、先生が生徒を見ると、誰かがいないような気がした。

「みんな、隣の席の人がいないか確認しろ」

俺は美保のほうを向いてうなずきあつて、いたら

「福島がいないぞ!!」

と、一人の生徒が叫んで、俺は叫んだ生徒の座っていた席に行くのと、いたはずの転校生、そう、教育委員長の娘、福島奈々子がいなくなっていた。

そして、福島奈々子がいいたはずの、机を見ると

一人目消失

と書いた手紙がとダイヤのエースのランプが置いてあった。

五、二人目消失

あの後、学校中は大変な騒ぎとなった。

校長先生が脅迫状を発表し、警察を呼び、福島奈々子の両親に電話。でも何も手がかりがなく不審者が現れた形跡もなかった。

明日は三時間目にプロマジシャンが来てマジックを披露する予定だったが、この誘拐事件で、明日のマジックショーは無理かと思われたが、全校生徒が反対して万全の体制で行われることになった。

そして今日はやってきた。

今日はみんなが、楽しみな日でもあつて不安な日でもあつた。

一時間目は国語の授業、美保と今日のことについて話してた。

「今日、誘拐事件あると思う？」

俺が聞くと美保は

「あるんじゃないの？ やっぱり」

「やっぱり、あるよな」

俺はため息をついて

「俺は今日のマジックショーが怪しいと思うんだよな」

「あー、あたしも怪しいと思う、何かマジックの途中でパツッといなくなっちゃうとか」

「縁起でもないこと言うんじゃないよ」

進は今回は美保の予想が当たらないように祈った。

二時間目は予想通り何も起きず、三時間目のマジックショーの間が来てしまった。

マジシャンの名前は「アロ」と「ノウ」（どちらも偽名）が来て、マジックが始まった。

最初のマジックは、トランプマジックや、コインマジック、など

という、テーブルマジックだった。

そして、最後で最高のマジック、箱の中に人を入れて入った人を消すと言うマジック。

箱の中に入るのは、将来先生を目指している、植松真理。真理は疑い深い顔で、ステージに上がり箱の中に入っていた。

真理は箱のなかに入り、箱のドアを閉めた。そして、箱をあけると何と真理が消えていた。そして、またノウが、ドアを閉めてアロが、ワン、テュー、スリー、ハイといって、ドアを開けると、何とそこには真理が、いなかった。生徒たちが「どこにいるんだよ」とか「消えた」とかい出し、警察は何も意味が分からず、おろおろしていた。

しかし、一番驚いていたのは、マジシャンの「アロ」と「ノウ」だった。

アロは急いで箱の中を調べるとそこには

二人目消失

という置き手紙とダイヤの荷のトランプが残されていた。

六、進の推理と美保と高橋さんの推理

マジックの後、アロとノウは事情聴取をされるため警察署に向かった。その後、保護者説明会があり、これから警察官を百人動員して、消えた二人を捜索するという事になった。でも、学校を休むことはできず、警官五十人動員することになった。

あたしは、事務室に来ていた。

あ、あたしは美保。今、事務室に来ています。で、こちらは事務員の高橋光介さん。

「はじめまして、高橋です。」

高橋さんは、無口だけど無口だけど本当はやさしい人なの。で、何であたしがここに来てるかというと、進がいつも話とか進める役で、あたしが脇役みたいな感じだから、あたしも話とか進めてみたいから、ちよつと事務室に来て、高橋さんにいろいろ聞いてみるって言うことなんです。では、早速、高橋さんに、ちよつと今回の事件について聞いてみるとします。

「高橋さん、何で誘拐事件なんて起きるんでしょうか」

「えーと、それはですね。この学校の誰かにうらみを持つてるとか、マネーのためにやってるとかですね」

「へえ、高橋さんって推理上手いですね」

「うんまあ、実は探偵関係の本とか、ルパンとか読んでたから」

「へえ、すごいですね、探偵関係の本ってたとえば何ですか？」

「名探偵コナンとか」

「えっ……でも、ルパンは読んでいたんですね、あたしも好きですよ、ルパン」

「三世のほうだよ」

「……………」

「どうかした？」

「いえ、なんでも、では今回の事件の推理についてお願いします」

「はい、私の推理によると、犯人は分からないが、この学校の誰かというのは確かだ!!」

「え……何で」

「まずこの学校に不審者は進入していない。ということはこの学校の誰かになるっていうことだ」

「じゃあ、高橋さんが犯人の可能性もあるんですか」

「うん。確実に僕が犯人というわけではないし、犯人の可能性もある」

美保は高橋さんが犯人じゃないことを祈った

そのころ、進は調査をしていた。まさか二人目も消えるとは思わ

なかった。まず一人目が消えた理科室を調べてみた。

犯人は坂本先生がプリントの束に火をつけてしまつてみんなの視線が先生に集まっているうちに、福島奈々子を消したと考えられる。

二日目は、体育館でやっていたショーの間に消えた。消えたのは植松真理。今はもうマジックの道具はない、でもまだ手がかりはあると思い、体育館に行つてみた。そこには、高橋さんと推理？を終え自分も手がかりを 探していた美保がいた。

「美保、何か手がかりはあったか」

「いえ、何にも」

「そうか……」

「……明日も誰かが消えるのかな」

「消えるだろ、そりゃ」

「もしかして自分が消えるかもしれないんだよ、怖くない？」

「そりゃ……怖いよ」

怪盗キサトは「明日もまた消してやる」

と言った

七、三人目の消失

俺らは明日に備えて、対策を練った。

消える場所の予想は、

教室・図書室・図工室・職員室・給食室と言う予想

- 次の日 -

いつも以上に学校は緊張感にみまわれていた。一、二時間目は理科の実験。同じ場所で犯行は起こらないと思うが、一応用心してやる。でも、やっぱり何も起きず一、二時間目は終わり、中休みに入った。

「美保、やっぱり同じ場所では犯行は起こらないよな」

「そりゃ、使われてない場所を狙うよ」

「三、四時間目は教室での授業だし、五、六時間目も教室だし……」
「要するに、犯行が起こればしたら、休み時間が怪しいよね」

そして三、四時間目も何も起きずに終わり、給食の時間がやってきた。

「やべっ、今日の放送俺だっけ」

直人が思い出したように言った

「直人、気をつけろよ。放送室で消されるかもしれないぞ」

「大丈夫だって、よりによって俺が消されるわけないだろ」

「……そうか」

「じゃっ、俺行ってくるから」

「ああ、消えんなよ」

走りながら、後ろ向きに手を振って直人は放送室へと向かった。

「まさか、怪盗キサトは俺を狙わないよな」

そして、放送は始まった

「五月五日、水曜日お昼の放送を始めます。まずはじめに……」

この時、直人の声は聞こえなくなった

「誰だ!! お前は!!」

「私の名は、怪盗キサト」

「そんなこと分かっている!!」

「じゃあ、聞くな」

「俺を誘拐するきか」

「そうだ」

「くそっ」

直人は、放送のマイクに大声で

「誰か助けてーーーーー」と叫んだ

「だまれ!!」

そういうと、怪盗キサトは放送のマイクで

「私の名前は、怪盗キサトです。三人目はもらいました。後二人」
その声は、声を変える機械を使っているのか誰かは分からなかった。

俺は体が勝手に動いていた。それは美保も同じだった。

放送室に着いたら、校長先生が鍵を開けているところだった。そこには、宮本先生、高橋さん、警察の人がいた。そしてドアを開けると直人の姿はどこにも見当たらなかった。

「直人！直人！！どこに行っただ？」

校長先生は放送室中を探したが、直人はどこにもいなかった。そして、下を見るとダイヤの三のランプがあった。

今回はどうして、置き手紙がないのか、さっき放送で自らの言葉で言ったからかでも、キサトはこの場所にいたはずだ。俺と美保二人で放送室を探してみると、おかしいものがあつた。

「ねえ、進、何でこんなところにはしごがあるの？」

「今は分からないよ」

全員で放送室の中をくまなく探したが、今さっき誘拐事件が起こったとは思えないほど、静かだった。

「でもこれといった物は、はしごしかないよ」

「校長先生。ドアに鍵がかかっていたんですか？」

「かかってましたよ」

「これで、キサトは放送室に入るのを遅らせて直人を消したことになりますよね」

「進、何か分かったの？」

「いや、まだ具体的には分からないけど、大体は分かったよ」

八、四人目の消失

今日は、岩村校長先生が体調不良でおやすみ。坂本先生もこのクラスの担任になってから、初めてのお休み。

みんなこの事件で体調を悪くしてしまったのだろうかでも俺たちはそんなこと言ってられない、今日も美保と朝早くから学校に来ていた。

「進、まだ眠いよ」

「俺たちがそんなこと言つててどうするんだよ」

俺たちはまず、これ以上の消失を防ぐために警官を各教室に二名ずつ配置させた。

まず昨日、俺の親友、直人が消失した放送室を調べることにした。俺はいつも以上に張り切つて捜査をしていた。まず、キサトは放送室に入つて、鍵を閉めた。そのとき、なぜ直人はキサトが入った瞬間に、放送で助けを呼ばなかったのかそれは今の時点では分からない、そして、直人を何かで眠らせてどこかに隠して、キサトも、どこかに行方をくらました。と言うのが俺の推理。

それで、美保の推理は。進と一緒に、と答えた。こいつ何がなんだか分からなくなつて俺の推理をパクつたな。まあ、それはいいとしてもとにかく四人目は必ず守らないといけない。

・そして、学校が始まつた・

今日は、坂本先生が休みだったので、一、二時間目両方ともテストだった。俺はテスト何かに集中できず事件のことを考えていたら、いつの間にかテストの終了の合図。0点の確率100%

「美保、お前テストできた」と俺が聞いた。

「うん。できたよ!!」と答えた。

「お前テストと事件どっちが大切なんだよ、俺なんて事件のこと考えていて、全くテストできなかったんだぜ」

「あたしは、テストが速く終わりすぎたから、空いた時間ずっと事件について考えていたよ」

こいつ、月曜日の算数のときといい、結構頭いいんだな

こんな感じで一、二時間目は過ぎていった

・事件は三時間目に起きた・

三時間目は「いろいろな人にインタビュー」をという国語の授業、

俺は、この時間に事件が起きないか心配だった。

グループに分かれてインタビューをして、それをまとめるといって俺は先生にインタビューをする班だった。そして、事件は起きた。

「あゝインタビューなんてめんどくさいな」と言っただのは田島光平。これから給食室の調理員さんにインタビューする所

「あのゝ、すみません」

「はい、なんででしょうか」

その声は、今まで聞いたことのない、女の人か、男の人かも分からない複雑な声だった。

「今いろいろな人にインタビューという国語の授業をやっているんですけど、ちょっとお話いいですか」

「いいですよ、じゃあ、給食室の中で話しましょう」

「あ、はい」

何で給食室でやるんだろうかと思いつつも入ると、その人の声は変わった。それはどこかで聞いたことのある声だった。

「あれ？何か声、変わりませんでしたか」

「はい、今までの声はあなたに本当の正体をばれないようにやるためだったんですよ」

その後、光平は深い眠りに落ちていった

四時間目になっても光平の姿は現れない。俺はいやな予感がして、光平の班の奴に聞いた。

「光平はどこにインタビューしに行ったんだ」

「給食室だと思う」

俺は美保と一緒に給食室へと走っていった。

「すみません」と言って給食室に入った

「ここに五年生の男の子がインタビューに来ませんでしたか？」

「いや……きてないよ」

「ああ、そうですか、失礼しました」

俺は、給食室にいく途中に誘拐された可能性が高いと見た
もちろん給食室にはダイヤの四のトランプと、

四人目消失、あと一人

という置き手紙がおいてあった。

九、最後の消失

次の日、警察の調べで、給食室にトランプと置き手紙がおいてあるのが発見された。俺は、自分がふがいなかった。しっかり給食室を探しとけばもっと早く捜査できたかもしれない。

「進、元気だしなよ。五人目を消失されないようにがんばろうよ」

「美保、結局俺は誰一人としてまもれやしないんだ、校長は体調を悪くするし……」

「進、今日の中休み図書室で会議しようよ」

「最後の人を消失させないために」

「そうだよ!!」

「よし、分かった会議しよう」

警察は、学校の中心に本部を起きたいということで、校長室に移動していたため、図書室は空いていた。

そこには、キサトが怖いのか誰もいなかった、しかし、体調を回復して元気に学校に来ていた。坂本先生がいた。

「おっ、進と、美保、何しているんだい？」

「いや、キサトについて会議でもしようかなと思って」

「そつえば、校長先生に頼まれたんだよね」

「あ、はい」

「じゃあ、先生も何か力になれることはないかな？先生もキサトは許せないからさ」

「いいですけど」

「でも、会議ってどういうことを話し合っただい？」

「五人目を消失させないためにはどうするか、とかいろいろ」

「へえ、じゃあ、早速会議でもする？」

俺は心強い仲間が出来たと思い、会議をしようと席に座ろうとした瞬間放送がなった

「私は、怪盗キサト五人目消失完了」

「なに！？」

俺は無意識に体が動いていた。

「先生、あたしたちもいきましょー！！」

「いや、僕たちは行かなくていいんだよ」

「何故ですか？」

「僕たちはここから消えるからだよ」

「え~~~~~~~~」

そして、坂本先生（怪盗キサト）と美保は姿を消した。

そのころ進は、放送室についてドアを開けようとしていた

ガチャという音とともに、ドアが開き進は放送室に飛び込むように入っていた

しかし、どこを探しても、怪盗キサトの姿は見当たらなかった。

「もう逃げられたのかな……」

放送室を探してるうちに進はあることに気づいた、それは、いつものランプと置き手紙がどこを探しても、見当たらないのだ

「おかしいな……」

そう思い、俺は図書室に戻ると、美保と坂本先生の姿はなかった
「おーい、美保、坂本先生、どこですか」

進はあることに気づいた、放送室になくあるものがここにあったのだ

消失完了

という、置き手紙とダイヤの五のランプが

十、怪盗キサトの目的

進は前向きに考えた、消えた五人の謎を、土曜日俺は一日中家で考えた。

「怪盗キサト、いや、坂本先生はどうやって俺を放送室に呼んで、美保を消して、自分も姿を消したのだろうか、坂本先生が怪盗キサトということは分かった、しかし……どうやって……いや、坂本先生を怪盗キサトとして考えるから良くないんじゃない……ん？もしかして、もしかして……！」

俺は、俺の推理が間違っていないかノートにこの五日間の出来事を全部まとめてみた

「やつぱり、全部の謎が解けた……」

俺は次の日の日曜日、全員の学校関係者を呼び出した。そして、ついに俺の謎解きが始まった。

「さて」と言つて推理を始めた。何故俺がさてと言ったかということ、なんかかつこよかったからである。

「みなさん、この五日間の連続誘拐事件についてどう思いますか？」

「まったくおかしなことをする奴だよ」

「誘拐した子達を早く返して欲しい」

皆さんが言いたいことはよく分かりました

「実は僕は自分なりに、昨日考えてみました、怪盗キサトとは何なのか、その結果あることに気づきました」

「何のことに気づいたんですか？」と副校長先生

「慌てないでください。実は怪盗キサトの正体とは坂本先生ですそして宮本先生です」

「ど、どういふことですか？」

「実は怪盗キサトとは、二人いたんですよ！！！」
そうこの二人は共犯で誘拐事件を起こした

月曜日、あの日は、理科の実験だった。坂本先生は髪にわざと火をつけみんなの視線を火に向けさせた。そのとき宮本先生が福島奈々子を呼び出してそのまま誘拐した。

火曜日、あの日は、マジックショーだった。あなたたちはマジシャンに植松真理を指名してくれ、と頼んだ。あのマジックのトリックは、もうあなたたちは分かっていました。あのマジックは奥が二重になっており、その中に入ったら宮本先生がいた。当然真理は、先生のもとへ行く、そして、そのまま姿を消した

水曜日、この日は直人が一人でいるところを狙った。

まず直人が放送室で、放送をしているときに、坂本先生が入る、当然直人は坂本先生は自分の担任なので、なにも怪しまない。そして放送で直人を誘拐したと言い、薬か何かで眠らせ、はしごに登り、直人を天井に隠した。そして、自分は隣の部屋に隠れた。
現場を見に来た俺たちが、宮本先生につれられ全員放送室へとうながされ、隣の部屋にいた坂本先生は脱出した。

木曜日、この日の犯行をしたのが学校を休んでた、坂本先生。

そう、その誰かが調理員さんに化けて来ていた。だから光平が来ることも分かっていたから外で待っていた。だからほかの調理員さんは気づかなかった。そして、光平をどこかに隠した。

金曜日、この日はあえて坂本先生は図書室にいた、図書室に誰もいなかったのは、今からここを先生たちが使うから、とでも言っただけで追いついたのだらう。そして俺と美保が図書室に着くと、宮本先生が放送で生徒を誘拐したみたいなことを言う。俺が放送室へ向かって

いるうちに、宮本先生はその場を去り、坂本先生は美保を誘拐した。

これで分かりましたね。

怪盗キサトの正体は坂本広輝先生と宮本絵海先生あなたたちだったんですね。

「……さすが、おじいさんが探偵だけある、全部正解ですよ、私たちが怪盗キサトです」

「何でこんなことをやったんだ!!」

「……うらみですよ。十四年前私たちが、まだ小学生だったころ私たちの担任はとってもいい先生だった、私はこの人に出会ってから先生を目指すことにした、でも、ある日その先生は卒業式の一ヶ月前姿を消した。私たちは何が起きたのか全く分かりませんでした。しかし、なぜ姿を消したのかが分かりました。植松元教師と校長そして福島教育委員長の裏で何か金が動いていることに気がついた私たちの先生は、それを調べるために校長室の金庫を調べたんだ。……しかしその瞬間を校長先生に見られてしまいました。

先生は、教師をクビにされ私たちの元から去っていきました。その裏金は今も続いているようです」

「その先生の名前は何と言うのですか」

「飯田昇先生です」

「何故、そのことを知っているんだ!!」校長先生が叫んだ

「そして、あなたたちの子供たちを誘拐して、あなたたちに脅迫するつもりだった、お金とかそういうもの目当てじゃない、ただ、ただ、……飯田先生に謝ってほしかったんだ」

「じゃあ、残りの二人は何故誘拐したんだ」

「その二人はただ捜査をくらますためだよ」

「今、誘拐した人たちはどこにやったんだ」

「宮本先生の家だ……」

そして、誘拐された人たちは、無事救出され、坂本先生と宮本先生は逮捕された。岩村校長や、教育委員長も裏金の件で警察署へと向かっていった。

「美保！！お前大丈夫だったか！！」

「うん、大丈夫だよ。だってさ、宮本先生の家だったらすごいんだよ。もう豪邸だよ。豪邸。宮本先生もすごく優しくて、ご飯だとかもおいしかったし、ゲームとかもいっぱいやったんだから」

「……あの二人子供が好きだったんだな」

「そりゃ、そうだよだなきゃ、先生なんてなれないでしょ」

「だよな」

「あの二人も悪い人じゃなかったと思うよ」

「ちよつとやり方を間違っただんな……」

屋上から見える景色を二人はいつまでもいつまでも見ていた。

（後書き）

今回始めての小説ということで、多少見苦しい所が何箇所かあると思います。そのようなところがありましたら、ご指摘していただくとこちらとしても何よりです。ここまで読んでありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7723f/>

消える五人

2010年12月10日18時48分発行